遊びの指導の技法

松村康平

「遊び」の状況においては、自己との関係、人との関係、物との関係が展開する。「と」自己、「と」物、「と」人との関係が展開する。「自己と人と物との関係」が展開する。

遊びの状況における**「遊びの指導」にかんしては、**自己との関係の発展がもたらされる指導、人との関係の発展がもたらされる指導、物との関係の発展がもたらされる指導などが、展開する。

「遊びの指導の技法」にかんしては、自己との、人との、物との関係のそれぞれの発展がもたらされる指導の技法が展開する。「自己と人と物との関係」の発展がもたらされる指導の技法が展開する。

遊びの指導の技法が展開する全体状況には、次のような状況がふくまれている。

物との関係にかんする技法が主として使用されてしかも自己との関係の発展が主としてもたらされる状況。たとえば、指導者が整備する遊具における関係（「と」物との関係）を焦点として、その遊具（物）と子ども（自己）と友だちや先生（人）と、その遊具以外の物との関係にかんする技法が使用されて、子どもの「自己との関係」（状況にふくまれている自己と人と物との関係にかかわり、その関係または状況の発展に主導的にはたらく自己）の発展がもたらされる状況。（註1）

人との関係にかんする技法が主として使用されてしかも物との関係の発展が主としてもたらされる状況。たとえば、協調的な友だち関係を焦点とする技法が使用されて「物」の所有状況が占有から共有へと変化し「と」物との関係の発展がもたらされる状況。ふたりでのって遊びやすいシーソーでの遊びが展開してその物の遊具としての機能が発揮される状況は、その例であって、物

の物としての重さや硬さ、かたちなどと遊具としてのその物の特性との関係の発展がもたらされる状況。

これは、遊びの「指導」の技法の展開する全体状況における状況として、物との発展にとどまらず、その物との関係の発展がその物と関連のある人や自己との関係の発展をももたらすものとして、位置づいている。この意味では、物との関係の発展がもたらされる指導が、人との関係や自己との関係の発展をもたらす指導ともなり得る性質のものであって、それでも指導の技法としては、たとえば、人との関係にかんする技法が主として使用されてしかも物との関係の発展が主としてもたらされることを意図する指導が成立する。

遊びの指導の技法が展開する全体状況には、ほかに、自己との関係にかんする技法が主として使用されてしかも人との関係の発展がもたらされる状況、自己と人と物との「関係」にかんする技法が主として使用されて人と物との関係の発展がもたらされる状況など、多様な状況がふくまれている。自己との関係にかんする技法が主として使用されて自己との関係の発展がもたらされる状況、つまり、自己指導の技法が展開して自己との関係の発展がもたらされる状況も、ふくまれている。

遊びの指導の技法が展開する全体状況では、自己との関係、人との関係、物との関係の発展がもたらされるように、自己との関係、人との関係、物との関係にかんする技法が使用される。これらの技法、たとえば人との関係にかんする技法と、指導の目標、たとえば、人との関係の発展との対応関係は、明確である場合も、そうでない場合もある。自己との関係にかんする技法を使用することと、自己との関係の発展との対応関係も、同様である。

自己と人と物との「**関係**」**中心の指導の特徴は、**「関係への関係」の技法を活用できるところにある。このことから、たとえば、自己との関係にかんする技法の使用によって自己との関係の内的発展をはばむおそれのあるとき人との関係なり物との関係なりにかんする技法の使用によって、自己との関係の発展をもたらす指導が可能になる。

「**指導**」**とは、**状況における関係の発展がもたらされる活動において、主導的な役割が遂行されるときの、その役割のとり方である。その役割のとり方が個人において成立しているとき、その個人は「指導者」と呼ばれる。この指導は、状況における機能としての役割のとり方であって、状況の担い手である人は幼児であれ、指導者となることができる。指導者となれている人には、主導的な役割を遂行する技能が認められる。この技能が意識されて、状況における関係の発展がもたらされるように活用されるとき、そこには「**指導の技法**」が成立している。この技法は、関係の発展に主導的な役制を果たせる人であっても必ずしも活用でき

るとは限らない。状況における関係発展の方向を洞察して、関係の発展に必要な関係のしかたが成立するようにふるまえる人において活用可能な技法である。

この技法は、関係の発展をもたらすのに必要な関係のさせ方（関係操作の方法）であり、関係の展開に即して見いだされる関係のしかたの変革（関係創造の方法）である。関係の発展をもたらす技法は、変化する関係（関係の過程）において見いだされ、それが活用されることによって関係の発展がもたらされる。この技法の「発見」「適用」および「活用」には、関係の変化・発展する「形像を描けること」（註2）が、重要である。集団活動の指導にかんしては、集団活動の形像描出のできることが重要である。ある状況からある状況への推移を予測的に「目にみる」ことが、技法の発見にはとくに必要である。遊びの指導の技法の発見には、遊びの場面状況の変化を「目にみる」ことができ、自己と物と人との関係の発展する遊びの場面設定に熟達する必要がある。

遊びの展開する具体的な場面で、どのように指導しようとするのか。その目的志向的な活動の内的要求は、技法の発見をもたらす。

ふたりの子どもがいて、別べつに遊んでいる場合に、人との関係の発展がもたらされるように主導的な役割をとろうとする指導者は、どこに位置を占めてどのようにふるまうか。子どもたちと関係的に存在している「かたち」、場の力の配置状態を「目にえがき」、どこに位置を占めて場の力をどのように体験できているか。指導者がその位置を移動すると、子どもたちとの「関係図」がどのように変容し、場の力の体験にどのような変化が生じるか。それらのこととの関連で、当面の課題をどのように解決したらよいか。指導者の意図がふたりの子どもの人との関係の発展にあるからといって、すぐにも近づいてふたりの手を結ばせようとするか。子どもどうしは離れて別べつに遊ぶことを、そのまま続けようとしているときでも、指導者の意図が人との関係の発展をもたらすことにあって、これを実現するには、どうしたらよいか。

たとえば、どちらの子どもも指導者には近づき手をつなぐとき、右の手ではAの手、左の手ではBの手とつないで、子どもたちにまかせる時をおき、次には指導者が自分の右の手と左の手を近づける。そのときは、自分の手と手をからだに近づけるようにして、どちらの手にも子どもの手のあることが、近づけることのなかで一段と気づかれる時点で、からだから離して近づける。そのことにより、子どもたちの手にひきつけられることが少なく子どもたちの手もらくにのびて、指導者の両手が合うところで、ふたりの手がつながる。そのときには指導者は、自分の手の合うところでつながる子どもたちの手の他の手のはしとはしは離れてい

て、向こうが大きく切れている輪のかたちを目にみている。そして、自分の近くでつながる子どもたちの手を上から自分の手でつつみ、つながったままの時がながびくようにしてから、すぐに移動して、目にみた向こうの、輪の切れ目に自分が立って、手を左右にのばし、子どもの手とつなげる。そこで、子どもたちの手と手の結ばれているところは、輪のはばがほそくても、切れていない環ができ、指導者は、輪を子どもたちといっしょに少しまわす。それで輪がじょうぶになって、子どもたちの人との関係における関係の発展がもたらされる。これは、人（または指導者の自己）媒介による人との関係（子どもたちの人との関係）の発展をもたらす指導技法の活用例である。

遊びの集団指導の技法にかんしては、集団の状況、集団発展の方向性をとらえ、たとえば、主リーダーと副リーダーのチームによる指導が行なわれれば、主・副それぞれのリーダーの技法が成立する。集団の状況が分離分散的でありそれの分離移流、重心凝集の方向への発展が期待されるとき、主リーダーは、領域連絡の役割をとり、透過鏡的技法を使用し、それとの関係で副リーダーは、グループの成員（子ども）の活動を受容し場所を付与する役割をとり、位置安定化の技法を使用するなどのことが展開する。この場合に主リーダーの資質としては、二者を自己に反映させ二者を関連づけたり、三者の過程的把握のできることがあがり、副リーダーの資質としては、動きをともなう動作的受容、場面分節的把握のできることがあげられる。（註3）

集団指導に必要な技法の数は多い。大きくわければ、自己との、人との、物との関係にかんする技法であって、具体的場面で展開される技法は、集団状況、遊びの発展段階、集団指導の目標、リーダーチームの性質などから多岐にわたる。ここに、集団状況（場の力の配置その他）との関係で主としてリーダーが使用する技法を、幾つか列挙する。

焦点化の技法。拡散の技法。焦点移動の技法。放射化の技法。連結の技法。前向結合強化の技法。組み合わせの技法。結合展開の技法。鳥瞰の技法。

開通路の技法。場面展開の技法。場面屈折の技法。場面制限の技法。場面均一化の技法。局所化の技法。場面内構造化の技法。状況内表出の技法。軌道敷設の技法、その他である。

参考文献

註1．飽田典子「自己について」昭和四十三年論文（未発表）
註2．三枝博音「技術の哲学」岩波全書（152）
註3．松村康平（編）「児童臨床学」（論文集）昭和四十三年